舞踊教育再構築（Ⅳ）－日本のおける舞踊教育の可能性－
－学校におけるフォークダンスの学習過程－

Reconstruction on Dance Education (Ⅳ)
－Possibilities of Dance Education in Japan－
－Learning Process of Folkdance in School－

三浦　弓技　　*矢島ますみ
Yuzue Miura　　Masumi Yajima

key wards：生涯教育，舞踊教育，学習過程，フォークダンス

はじめに

生涯学習社会に対応するダンス教育発展の可能性を検討するため，「舞踊教育再構築（Ⅰ）－ダンスの内在的価値の視点から－」においては，人々のダンス享受の歴史を「生活」と「学校教育」の両面から概観し，ダンスの特性をその内在的価値（欲求と文化様式）からとらえなおして４分類し，それぞれのダンスの価値を学習することの重要性を示した。

「舞踊教育再構築（Ⅱ）－学校におけるダンス・カリキュラム－」では，ダンス教育内容の組織・体系をどのように理論的に構築するか，縦軸として子供の精神的・身体的発達の視点からそのシーケンス（sequence），連続性（continuity），接続性（articulation）を，横軸として教育課程の幅と深さなどの空間的契機やバランスの問題としてのスコープ（scope）とインテグレーション（integration）との関係を分析し，ダンス・カリキュラムの全体構造の組立を行った。

「舞踊教育再構築（Ⅲ）」では，学校における創作ダンスの学習過程について，学習過程論の基本原理，日本における考え方の変遷，米英の現状を概観し，生涯教育の基礎としてのダンス教育の視点からみた場合の問題点を考察した。その上に立って，生涯教育の基礎として学校に求められている力，即ち，ダンスを愛好する態度，自発的・主体的にダンスに親しむ力，時・場・仲間に応じて再構成して楽しむ力を身につけることを目的とした場合の学習過程を検討した。

本稿「舞踊教育再構築（Ⅳ）」では，日本における学校教育においてはマイナーな存在であったフォークダンスを，行う者の立場からみた時，創作ダンスと等価であると考え，その本質的な魅力に触れ洗練し，生活の場での多様な活用と発展を考えた学習過程を検討することを目的とする。

1　学校におけるフォークダンス学習の変遷

昭和１１年の指導要領では，ダンスの学習内容は唱歌遊戯（既成作品），行進遊戯（行進とフォークダンス）に分けられ，フォークダンスの例示も数多くあげられている。例示のフォークダンスから，現在に比べ複雑で難しい踊りが多いことから，生活の中での活用より技能習得が強調されていたことがうかがえ，フォークダンスの社交的な楽しみを深める考えはまだなかったと考えられる。

昭和１７年になると外国のフォークダンスは姿を消し，基本ステップと既成作品となってくる。情緒的なダンスは軟弱な運動とされ，基本運動による鍛錬と，力強い活発な既成作品を提示することによってかろうじて学習内

＊明海大学経済学部専任講師

容として生き残ったとされている。国粋主義が強まると，外国のフォークダンスは敵国の文化として削除されていった。

戦後，すべてを失った悲惨な状況の中で，レクリエーション運動がクローズアップされ，ウインフィルド・P・ニブロ氏，マイケル・ハーマン夫妻，リッキー・ホールデン，キスレー氏，バックリー氏，スチュワード氏らの努力でレクリエーション，即ち，フォークダンスといわれるほどフォークダンスは盛んになり，第一次ダンスブームを巻き起こした。学校においては，民主的人間の育成，文化の伝承と創造，健康的な余暇活動の発展が目標となり，フォークダンスは目標達成に有効な手段として高く評価している。昭和２８年指導要領では，レクリエーションへの活用を目指し，ダンスの一分野として位置づけられている。以後，児童・生徒の愛好的な態度もあり，フォークダンスは健全なレクリエーションとして高い評価を得てきた。教材選択についても①民族・国家・地域，②ステップの種類や難易度，③フォーメーションの視点から検討して精選し，指導要領に学年別に踊り名をあげている。貧しい施設，運動用具の不足の中で，多人数の児童・生徒の学習が可能なこともあって，フォークダンス指導は活発に行われ，いろいろな場で活用された。しかし，ダンスの中で美的創造的経験，即ち，芸術的なダンスを高度なものとし，社交的・大衆的な文化を軽くみる傾向があり，内容の精選を課題とした昭和５３年の指導要領では，フォークダンスは削除され，取扱上の注意としてフォークダンスを行ってもよいと後退している。

平成元年の指導要領改定では，生涯スポーツを目指す教育が検討され，「運動の楽しさの享受」が重視されるようになた。ダンスも楽しみ方の視点から，文化様式の軸（型の伝承と創造）及び楽しみ方の違い即ち，欲求軸（リズムとイメージ）で分類し，リズム・定形型（このジャンルには社交的な踊りが多いので社交型と呼ぶ）の踊りの代表として，再びダンスの学習内容にフォークダンスは復活した。ここでは，行う者の立場から各種のダンスは等価であり，欲求充足の違いが各種のダンスを生み出したと考えられている。時代の状況や価値観・学力観の違いにより，フォークダンスへの価値評価が左右され，ある時は重視され，ある時は軽視されていることがうかがえる。学校では創作ダンスの研究に重点がおかれてきたため，レクエーション協会やフォークダンス連盟の努力によって，フォークダンスは普及されてきてはいたが，学校教育においてフォークダンスの自発的・主体的な学習や，生活へ発展を自ら企画・運営する学習についての検討が不足していたと考えられる。

2　フォークダンスの機能的特性

フォークダンスの特性は，ダンスを欲求充足のし方（リズムとイメージ）と文化の様式（伝承と創造）を軸として分類すると，「伝承されたリズミカルな運動の型を覚えて，特徴にふさわしく踊る社交的な運動」に分類される。経験のあるものもないものも，技能の低いものも高いものも，男女で協力して誰でもこの特性にふれる喜びを体験し，もっと踊りたい，踊る機会をつくろうと自発的に取り組むことが期待できる。

フォークダンスは，ごく普通の一般の人によって，長い年月をかけて踊り伝えられてきた踊りである。それは村や町の人々が，共にリズミカルに踊るという楽しみを共有し，人と人を結つける働きをしてきたといえる。従って，踊りはそれぞれの地域の気候・風土・国柄・生活が育んだ独特の情感をもっており，そこに大きな魅力がある。基本的には発生した狭い範囲の地域の文化的特徴を持っているが，それはまた，大きく生活様式の類似によって似通った特徴をもつことが明らかにされている。稲作農耕民族の踊りは，大地に根を下ろしたように腰を沈め，手ぶりが多く，右手と右足を動かすといった平行性の動きが多く，騎馬民族の踊りは，３拍子で跳躍や回転が多く，草原で生活する民族の踊りは，どんどん移動する踊りが多いといわれる。このように，世界各地の生活感情に根ざした踊りの特徴，面白さにふれ，伝承されたリズミカルな動きの型を覚え，共に踊る社交的な楽しさを味合う学習の確立が必要である。

3　フォークダンスの学習内容

フォークダンスの面白さや魅力にふれて，自発的に学習し，生活の中で自ら活用の場をつくり実行できる子どもを育てるためには，次のような知識，技能，態度の学習が必要である。

1）国際理解と生活化を助ける知識

フォークダンスは，その踊りが発生した国の環境や生活文化を反映している。それらを知ることによって，フォークダンスの本質的な魅力に触れることができる。フォークダンス（日本民踊を含む）は，人がなぜ踊り，生活とどう結びつき，また，踊りが社会でどのような役割をしてきたかを考える手がかりとなり，舞踊文化を通じて自国の，また，世界諸国の違いと価値観を身につけることが重要となる。

次に世界共通のステップ名や各種の決まりを知ることも大切である。世界の人々と即座に手をふれ合って踊ることができるなら，心を開き意志疎通の道が開かれる。こうした知識は，一層重要な内容となろう。

また，フォークダンス・パーティや発表会を企画・運営するための知識（踊りやゲームの選択と構成，プログラムの組み方，係の役割）を持ち，生活化していく力も重視されよう。学習の進んだ段階では，自分たちの学習を人に見てもらいたい欲求を持つようになる。学級で，学校で，社会の施設やクラブを訪問して発表する企画・運営の力も重要である。

2）社交の楽しさを深めるための技能

フォークダンスは，構成された型を覚え，仲間と対応して踊り，コミュニケーションを図るところに面白さがある。いろいろな国の踊り，対応の仕方の異なる踊り，難易から踊りを選択し学習することになろう。相手と共に踊るには，構成されたリズミカルな型を覚えて踊る，相手とのスムーズな対応の仕方の技術の習得が欠かせない。また，それぞれの踊りはその国の文化を背景とした特徴をもっているので，特徴にふさわしく踊る技能の習得がより楽しさを深めるために重要である。そして，易しい踊りをいろいろ楽しみたい場合と，難しい踊りの踊り方を洗練したいという二つの方向があるので，欲求に沿って楽しみの深め方を学習する必要がある。

3）社交の楽しさを深めるための態度

男女・国籍・年齢などにこだわりらず誰とでも協力して楽しく踊る態度や，協力して楽しく踊るマナーが重要である。更に，いろいろな機会をとらえて，クラス・年齢を越えてコミュニケーションを図る態度，即ち，生活化する態度が求められる。そこでは，集まる仲間に応じて，踊りを選択したり，簡略化したり，相手が楽しく踊れるように教えたりする態度が大切となる。

4　生活文化としてのフォークダンス種目の選択

1）地域舞踊の魅力を十分持つ代表的な踊りを選択

いろいろな地域の音楽やリズム，ステップ，対応の仕方やフォーメーションなどの踊り方，そこからかもしだされる独特の情感の違いは，踊りを育ててきた国の気候・風土・生活・習慣・生き方が感じられ魅力を作り出している。文化圏の異なる国のフォークダンスの中から代表的な踊りを選択するようにする。

2）学習者のレディネスにあった踊りの選択

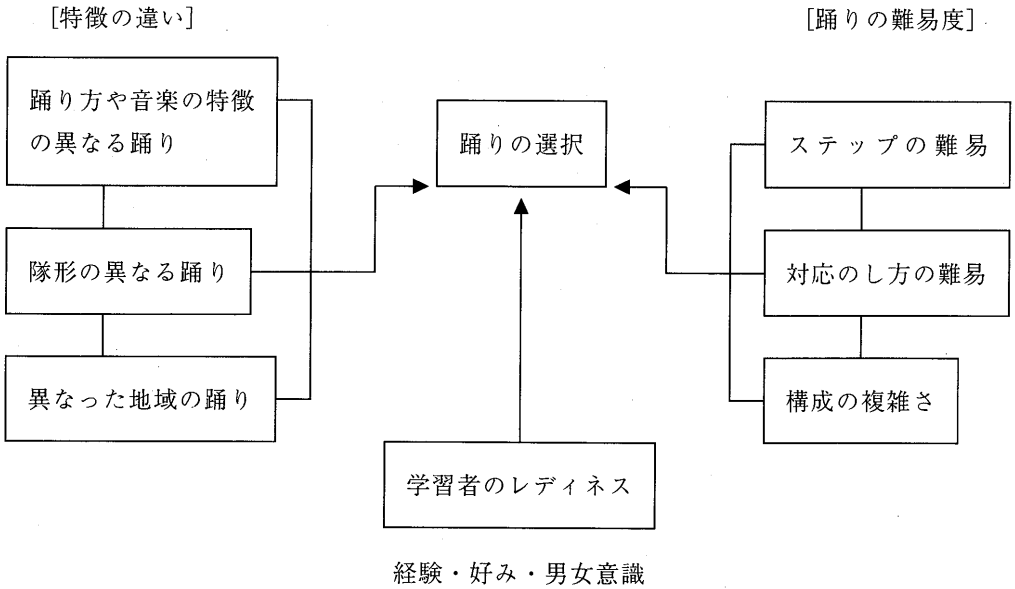
一般的に，人が楽しいと感じるのは，そのものの独特の魅力，面白さに触れ，自分の能力を十分発揮出来たときである。踊りの難易度が学習者に適していることが重要なポイントとなる。ステップが非常に難しかったり，二人の対応のし方が難しかったり，構成が複雑で長かったりすると，気軽に踊ることはできない。クラスのフォークダンスの学習経験を考え，少し努力をすればできそうな適切な踊りを選択するようにする。本来フォークダンスは，民衆の中で踊り継がれたものであるから，経験や能力に関係なく誰でも参加できるものである。しかし，長い年月の間にフォーメーション，ステップ，相手との対応等，複雑なもしくは難しい技術をもつ踊りも生れてきた。これは易しい踊りではあき足らず工夫と洗練が重ねられた結果であろう。易さしい踊りから難しい踊りまで，多種多様な踊りを用意してくれているので，学習者のレディネスに応じた種目を選択することは，難しいことではない。難易度を考慮して変化に富んだ踊りを選択することが必要である。

3）学習者の好みにあったフォークダンス種目の選択

次に，考慮を要するのは，学習者の踊りに対する好みである。ある踊りは熱狂的に好まれ，またある踊りは活用されないで消えていくということはしばしば起こる。マイムマイムやコロブチカのように時代を越えて愛好される踊り，ワシントン広場などのように一時期好まれただけで忘れられる踊りがある。他国の踊りは，学習者のフィー

リングにあった踊り，例えば，アップテンポを好む現代の子供の感覚にあっている躍動的な踊りの選択などがあげられる。また，フォークダンスの好みは，年齢的に男女が反発し合う時期には，離れて感じ合って踊る踊りが好まれるので，種目の選択や学習順序に配慮が必要であろう。(表1)

表1　踊りを選択する視点



5　生活への活用を考えたフォークダンスの学習過程
～楽しさの深まりと学習の発展が一致した学習過程～

1）フォークダンスの魅力に触れて自発的に取り組む学習過程

誰でもすぐ踊れるところに特徴がありながら，リズミカルにステップが踏めない，リードしたりされたりして，相手とうまく踊れない場合が多く，練習すればより楽しく相手とコミュニケーションできる。また，発生した国の生活や文化がにじみでているので，踊りの特徴にふさわしく踊らなくては，本当の楽しさには触れられない。従って，①易しい踊りから複雑・難しい踊りへと発展させる，②おおまかな踊り方から相手と共応し洗練した踊り方へと発展させる，③踊り方を覚えることから踊りの特徴にふさわしく踊る工夫をする学習過程を検討する必要がある。

2）経験や欲求に対応した学習過程

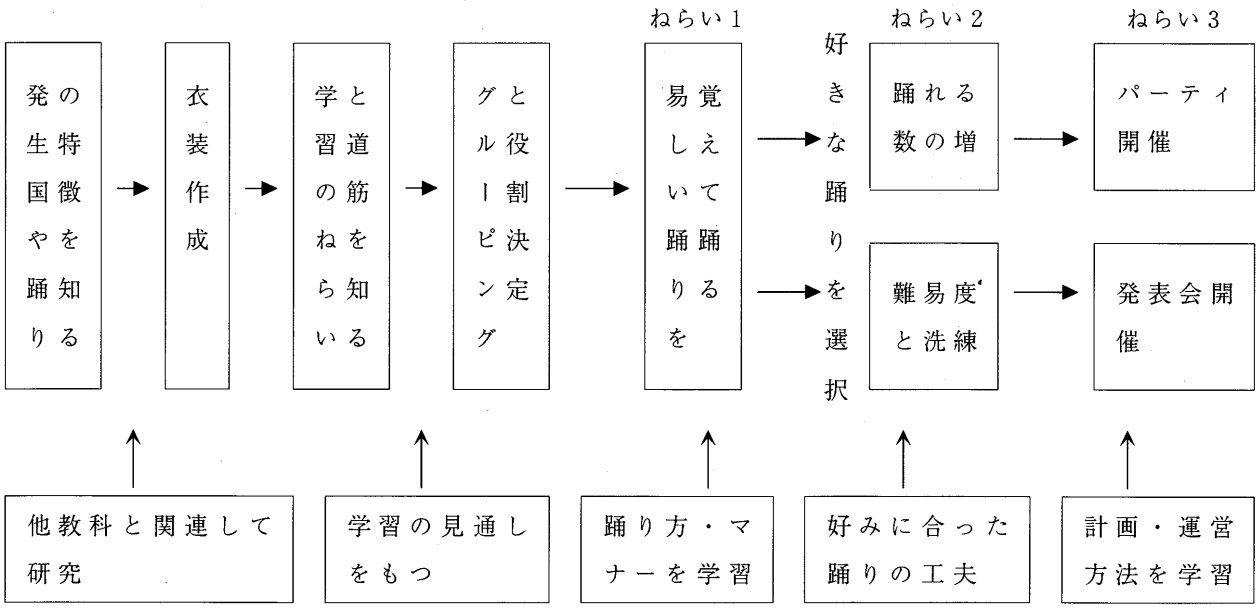
学習者のフォークダスに対する欲求も，やさしい踊りを男女で仲良く踊る社交に魅力を感じているもの，もっと高度な技術を持つ踊りを，美しく踊りたいもの，更には，洗練した自分たちの踊りを人に見せたいという達成的なものまで，その楽しみ方にも広がりがある。学習者の欲求がどこにあるか把握し，学習のねらいや発展の道筋を決めていくことになる。小学校期の子供は，主として踊れるレパートリーを増やしたい場合が多く，国やフォーメーションや相手との対応の仕方の違う易しい踊りを選択し，次々に覚えて踊れるようにする。こうした場合は，既習の踊りを踊って楽しみ，更に，新しい踊りを覚えて，相手との対応のし方を工夫し，踊りの特徴にふさわしく踊る練習をし，フォークダンス・パーティを開く学習過程が考えられる。

中・高等学校で学習経験の多い場合や，同性のみの授業の場合は，易しい踊りではあきたらず，難しい・複雑な踊りを覚え，洗練していくことを望む場合もでてくる。こうした場合は，今もっている力で易しい踊りを覚えて踊り，次に，やや難しい踊りを覚えて，美しく踊る工夫や体形を工夫して練習し，それぞれの成果を発表して楽しむ学習過程が考えられる。(表2)

3）フォークダンスの学習過程のバリエーション

学習者のフォークダンス経験，どのように発展したいかの欲求などに応じて，学習過程の工夫をしていく必要が

表２　フォークダンスの一般的学習過程



ある。フォークダンスを始めて学習する場合は，踊れるレパートリーがなく，ステップやリズムののりも悪く，また，相手との対応のし方のこつも分からない。こうした場合は，易しい踊りを次々学習してレパートリーを増やしていくことに楽しさを感じる。従って，易しい踊りを覚え，特徴にふさわしく相手と楽しく踊る工夫をするスパイラル型の学習過程が適している。また，多少の経験があり踊れるものがある場合は，既習の踊りを十分踊って洗練し，次に，欲求の高まりに応じてやや難しい踊りを学習する学習過程をとることが，自発性を維持発展させることになろう。この場合は，ステージ型の学習過程となる。

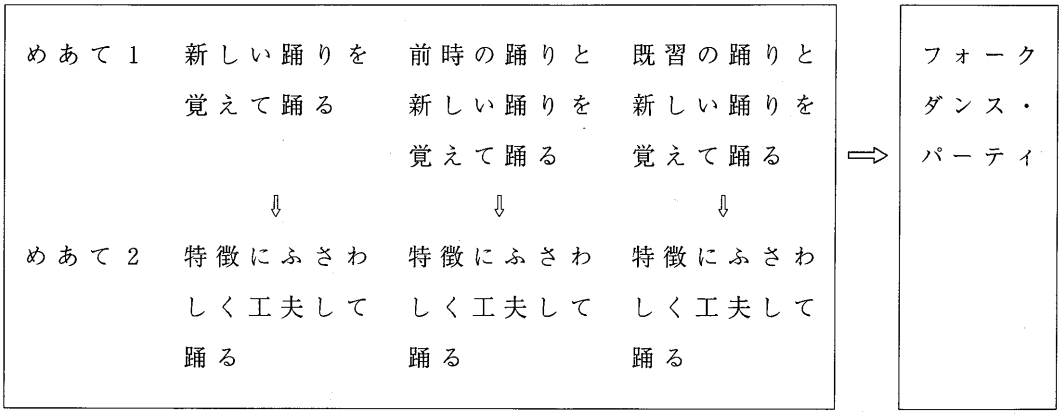
フォークダンスの学習や経験が深まると，踊れるレパートリーも増え，自分のフォークダンスの好み，好きな国の踊りが次第にはっきりしてくる。ギリシャの踊りが好き，北欧の踊りが好き，日本民踊が好きなどである。こうした場合は，既に踊れる踊りを学級で踊って洗練し，次に，好みに応じてグループをつくり，衣装も工夫して一つの国の踊りを追求していくステージ型の学習過程が考えられる。そして，グループ相互に工夫した踊りを教え合いながらパーティを開くこともできるし，発表会を計画して学習結果を見せ合う，また，老人クラブなどで見てもらうなどの発展が可能である。

フォークダンスの特性は，ダンスを通じて仲間とコミュニケーションするところにあるが，共に踊るコミュニケーションのし方，見る・見せることによるコミュニケーションの双方に発展する学習過程を考えておきたい。(表３)

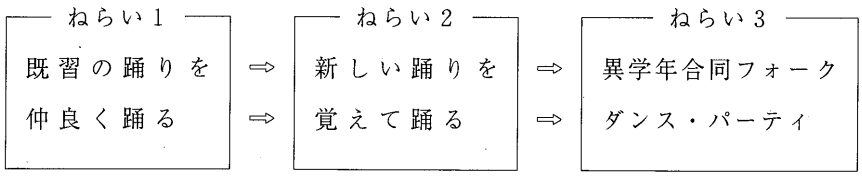
表３　フォークダンスの学習過程のバリエーション

A　レパートリーを増やして楽しむ学習過程

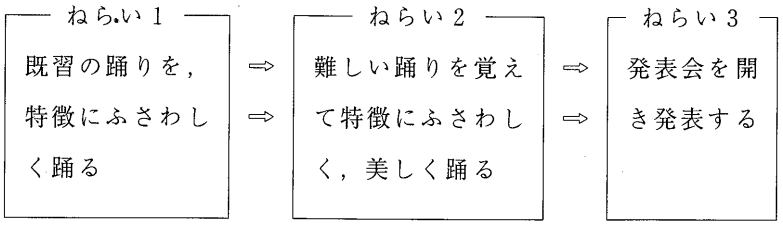
①既習教材のない場合（スパイラル型）



②既習教材がある場合（ステージ型）



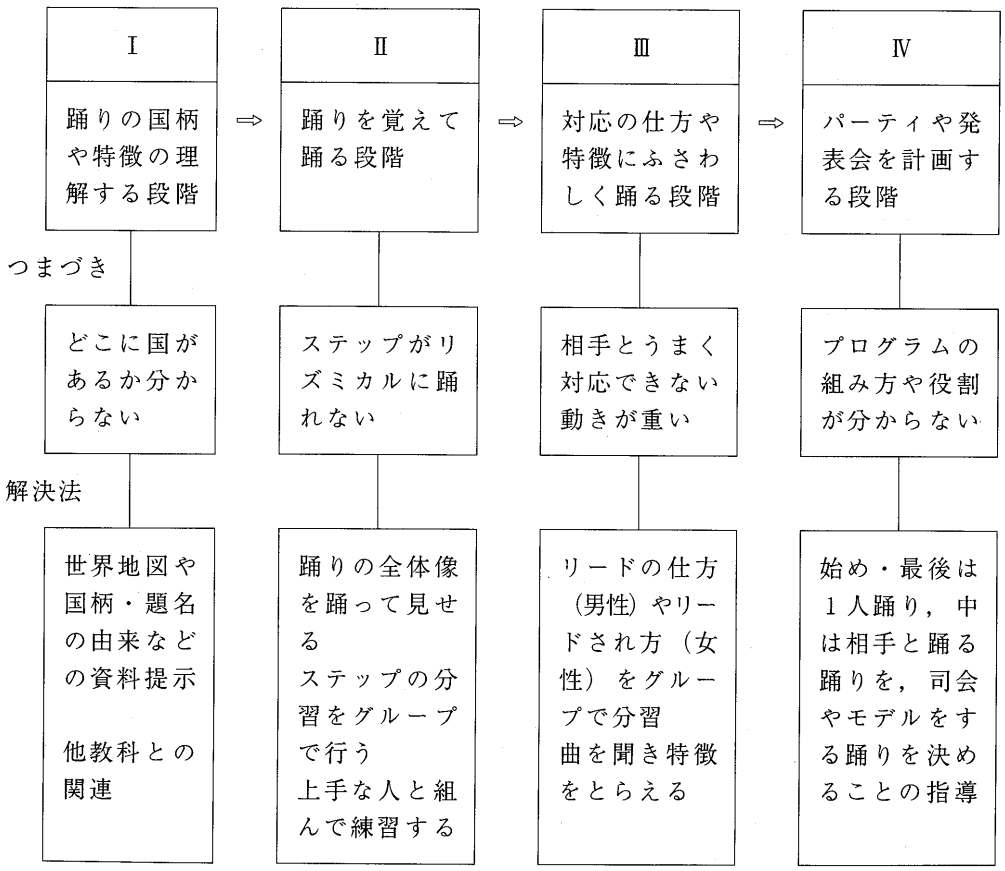
B　難しい踊りで美しい踊り方を楽しむ学習過程（ステージ型）



6　つまずきと問題解決の指導

フォークダンスは，最初に発生した国の気候・国柄・生活・衣装・音楽などを，地理や音楽の学習と関連させたり，本や写真や地図などで調べたり，教師が教えたりして理解させる。踊りを覚える時は，フォークダンスで用いる用語を理解させるようにし，次第に自分たちで本やビデオを見て，学習できるようにする。対応や特徴にふさわしく踊る練習時には，グループで教え合ってできるように，そのポイントとなる点を指導する。パーティを開く時には，事前にプログラム順序を決めたり，心を開くためのゲームの担当を決めるなどしておくようにする。（表4）

表4　フォークダンス学習のつまづきと解決法



ま と め

多くの国では国立民族舞踊団があり，また，生活に深く結びついた存在である。変化に富み魅力的なフォークダンスも，学校では長らくマイナーな存在として扱われてきた。人がなぜ踊るのかの原点をみせてくれるフォークダンスの学習を，学ぶ者にとって意味あるものにする学習についての研究は，創作ダンスに比べ著しく遅れている。本稿では，フォーダンスの特性である仲間と共に踊る楽しさ，男女のこだわりのないコミュニケーション，世界の人と民族の香りをたたえた舞踊文化を通じてのコミュニケーション，これらの価値を体得し学習者にとって意味ある学習を形成する学習過程の考え方とバリエーションを提示した。

参考文献

1，J．ローソン　森下はるみ訳　「フォークダンス」　大修館書店　１９７５
2，日本フォークダンス連盟「世界のフォークダンス」１～５　大修館書店　１９７５
3，日本フォークダンス連盟「世界と日本のフォークダンス」　大修館書店　１９７１
4，日本フォークダンス連盟「フォークダンスの理論と実際」　遊戯社　１９８１
5，日本フォークダンス連盟「ふる里の民踊」１～２　全音楽譜出版社　１９７１
6，日本フォークダンス連盟「学校のフォークダンス」　世界書院　１９６０
7，松原五一　「フォークダンス」　泰流社　１９７４
8，三浦弓扶　「ダンスの学習指導」　光文書院　１９９４
9，三浦弓扶　「フォークダンスの特性と学習過程」　学校体育４２巻７号　１９８９
10，三浦弓扶　「ダンスの特性のとらえ方と学習過程」学校体育３８巻２号　１９８５
11，佐伯聡夫　「今，なぜ学習過程を問い直すのか」　学校体育４７巻７号　１９９４
12，竹田清彦　「体育の学習過程の変遷」　学校体育４７巻７号　１９９４
13，和田　尚　「子どもの発達と学習過程」　学校体育４７巻７号　１９９４
14，片岡康子　「ダンスと学習過程」　学校体育４７巻７号　１９９４